懸命の復旧作業、阻む余震

鳥取県西部地震

伯備線まひ続く

米子空港 11日再開の見通し

鳥取県西部地震の影響で、県内のJR伯備線、米子空港は地震発生の六日以来、まひしたまま。夜を徹して八日も懸命の作業が続けられた。閉鎖されている米子空港は同日、「十一日ごろ再開の見通し」と境港市が明らかにした。一方、JR伯備線は、八日になって新たな土砂流出が発生するなど、復旧の見通しは立っていない。

滑走路にひび割れが発生した米子空港では同日、二千㍍の滑走路のうち、約千㍍部分の補修が終わった。しかし、誘導路にも亀裂が多く、九日以降も修繕作業は続く。

境港市役所内で開かれた市幹部会で、米子空港再開が十一日ごろとなる見通しが明らかになった。

市担当者によると、航空自衛隊美保基地が滑走路内の亀裂十カ所の復旧を進めており、十一日ごろには空港を再開できる、との見通しを伝えてきたという。

陰陽の大動脈・JR伯備線は八日、ようやく作業が本格化した。小さな被害個所は七日までに終わったが、同県日野町内では、山崩れや線路下の土砂流出が多く、四百五十人を動員して懸命な作業が続いた。

中でも同町根雨トンネル（百七十五㍍）前後は、約五百㍍の間に四カ所の被害。線路は日野川を挟んで道路と離れており、現場近くから重機が引き込めないため、遠くから線路伝いに入れ、前日までにようやく数台の準備が整ったばかり。

大勢の作業員がスコップを手に土砂を取り除いたり、土のうを積み上げたりした。しかし、断続的な余震で作業を中断、現場を離れる場面も多かった。

側溝の土を取り除いたり、土のうを積み上げたりして、復旧を急ぐ作業員ら＝8日午前10時45分、鳥取県日野町根雨、JR伯備線根雨トンネル付近

日野で土砂崩れ

181号通行止め

八日午後零時十五分ごろ、鳥取県日野町貝原のJR伯備線わきにある山の斜面から、長さ約五十㍍、幅五㍍にわたって土砂崩れがあり、線路と並行して走っている国道181号をふさいだ。国道は全面通行止めになり、根雨土木事務所が土砂を取り除く作業をしているが、まだ崩れる恐れもあり、復旧のめどは立っていない。

また根雨土木事務所は、日野町下菅、数津橋付近の国道180号を仮設防護さく設置のため、八日午前九時から十三日午後五時まで全面通行止めにした。現場は、地震によって道路わき斜面から落石があり、片側通行になっていた。

通行止め一時解除

米子道点検

日本道路公団中国支社は八日、米子自動車道溝口IC―米子IC間下り線で、六日の地震のため段差が生じていた橋の補修工事を完了し、通行止めを解除した。これで同自動車道の通行止めはすべて解除された。

仮復旧の状態で、安来道路と同様、全区間で五十キロの速度規制が続いており、本復旧のめどは立っていない。

◇

午後九時前に発生した余震の影響で、同公団は、同九時十五分から米子―蒜山IC間を点検のため全面通行止めにした。

松江―岡山間など増車

一畑バス

一畑バス（松江市）は八日、鳥取県西部地震でJR伯備線が不通になっていることから、九日運行の松江温泉―岡山間のバス四往復をそれぞれ二台ずつに増車するほか、出雲―大阪間の二往復も二、三台に増やすことを決めた。

同社は「十日以降については伯備線の復旧状況を見て増車するかどうか決める」としている。

山陰と山陽を結ぶ大動脈

ドル箱列車〝大打撃〟

被害予想超える

山陰と山陽を結ぶ大動脈・JR伯備線は、地震発生以来三日間、不通が続いている。JR米子支社は「被害が予想以上に大きく、度重なる余震による被害の拡大もあって、復旧時期の確定ができない」。また「『やくも号』が三日間も走れないのは、JR発足以来の出来事」という。

伯備線の特急「やくも号」は、出雲市―岡山間を一日十五往復、平均約四千三百人を運んでおり同支社の〝ドル箱列車〟。加えて出雲市―東京間の寝台特急「サンライズ出雲」もストップしたままで打撃は大きい。

同支社は代替輸送として八日から、出雲市―鳥取駅間に臨時特急「くにびき号」を二往復運転し、智頭線経由の京都、岡山行きの特急列車に接続。大阪行きの急行「だいせん」を米子駅から出雲市駅に延長運転している。また、播但線経由の特急「はまかぜ」など八本を米子まで運転延長、臨時列車を一往復させている。

同支社は九日災害情報センター（電話0859・32・0253）を設置、午前九時―午後六時まで問い合わせに応じる。

（10月9日　山陰中央新報抜粋）

復旧作業が終わり、運転を再開した伯備線の土砂崩れ現場を通過する特急列車（10日午後２時29分、鳥取県日野町下黒坂で）＝土屋功撮影

鳥取県西部地震

JR伯備線 復旧

米子空港もきょう再開

鳥取県西部地震の被災地では十日、地震以来ストップしていたJR伯備線の新郷―伯耆大山（ほうきだいせん）間（五十五・六キロ）が開通、通常運転にもどった。滑走路の亀裂などで閉鎖されていた米子空港（境港市）も補修工事が終了し、十一日から全便の運航を再開する。大阪管区気象台によると、震度1以上の余震は徐々に減っているが、十日は午前零時から午後九時までに三十五回、同九時五十八分には震度4の余震もあった。初日からの累計は、これで六百二十六回に達した。

（2、35面に関連記事）

JR伯備線は土砂崩れなどで不通となっていたが、連日の徹夜の修復作業の結果、この日午後一時二十九分、米子発岡山・新見行きの普通電車で運行が再開された。

米子空港では、空港を管理している航空自衛隊美保基地が、滑走路上空での試験飛行を実施。地上の機器が正常に作動していることを確認した。

このため、全日空、中日本エアラインの航空二社は、十一日の始発から運航を再開することを決めた。全日空は米子―東京の往復四便、中日本エアラインは米子―名古屋、米子―福岡の同各一便で、十日夕から予約が入り始めた。

（１０月１１日　読売新聞抜粋）

鳥取県西部地震

3県で24校休校

JR復旧 9府県でけが131人に

鳥取県西部地震から四日が経過した十日、被災地では市民生活の正常化に向けた動きが活発になった。多くの学校が授業を再開、住民の避難生活が続く中、子供たちが四日ぶりに登校した。ただ、震源に近い日野、溝口など三町では小中高の全校が再開できず、休校は県西部　十八校に上った。島根県内の五校と岡山県内一校も休校となった。

一方、土砂崩れで不通になっていたJR伯備線・新郷（岡山県）―伯耆大山（鳥取県）間は十日午後一時半すぎ、丸四日ぶりに復旧。これで同地震によるJR各線の影響はすべて解消された。また、閉鎖されていた米子空港は十一日朝から平常ダイヤの運航が始まることになった。

また、十日現在、各府県警の調べによると、家屋損壊は余震の影響などから島根県安来市などで拡大し、七県で全半壊四百十一棟を含む七千三百六棟に達した。けが人は九府県で百三十一人。

避難住民は鳥取県で大幅に減り、岡山県一　但された。

4日ぶりに復旧したJR伯備線を走る特急「スーパーやくも」（10日午後2時24分、鳥取県日野町）

（１０月１１日　日経新聞抜粋）

住民生活 徐々に回復

５日ぶりに復旧した米子空港に到着した東京からのツアー客ら＝11日午前８時45分

鳥取県西部地震

米子空港が再開

87校で授業スタート

鳥取県西部地震から六日目の十一日、閉鎖されていた米子空港が通常ダイヤで運航を再開。ＪＲ伯備線も正午ごろから通常の運行体制に戻り、公共交通機関の復旧はほぼ完了した。有感地震の回数は午後四時現在で十六回に減少し、小、中、高校では日野、江府町の十一校を除いて授業が再開するなど、市民生活のリズムは少しずつ回復に向かっている。

（22、23、25、27面に関連記事）

有感地震回数は急減

米子空港には午前八時四十分、東京からの第一便として団体客を含む百十五人を乗せたエアバスＡ３２０（百六十六人乗り）が到着したのを皮切りに、東京便の残り三往復と名古屋、福岡便各一往復が通常ダイヤで運航、五日ぶりに活気が戻った。

東京から一便で訪れた東京都足立区の主婦、細川時枝さん(六四)は「テレビを見て心配していたが、大丈夫なようなので、出雲大社にお参りするためみんなで来ました」と話していた。

また、十日夜の余震で、点検のため運転を見合わせていたＪＲ伯備線も、正午過ぎから通常運[illegible]を始めた。

地震翌日の七日に小中学校八十四校、高校十四校が休校した鳥取県西部では、十一日までに八十七校が授業を再開。引き続き休校している日野、江府両町の十一校についても、十六日までに学校生活がスタートする予定だ。被災した児童や生徒たちへの地震の影響が心配されているが、県や被災地の教育委員会では、専門医やカウンセラーを派遣するなどして心のケアに力を入れている。

一方、建築士ボランティアが行っている損壊住宅の危険度判定で「危険」と判定され、立ち入り禁止勧告を受けた住宅が十一日までに約三百棟に上っており、根雨土木事務所や西伯、会見町役場では派遣された県の職員や町の担当者らが訪れる多数の住民の対応に追われている。鳥取県災害対策本部によると、十一日午後四時現在、全半壊家屋は二百八十六棟で、一部損壊を含めると三千二十七棟。避難者数は七市町で四百九十六人。土木、農林水産被害は約二百三十億円に上っている。

鳥取地方気象台によると、地震が発生した六日に二百十三回あった有感地震の回数は、十一日は午後四時現在で十六回と、急激に減少している。

鳥取大工学部の西田良平教授（地震学）は「八日の震度５弱の地震が最大余震となる可能性があるが、今後も活動を注視することが必要」と引き続き警戒を呼び掛けた。

（１０月１２日　日本海新聞抜粋）

JRが運転再開

JR米子支社は、十日午後九時五十八分に発生した震度4の余震で、運転を見合わせていた山陰線と伯備線の一部区間と、境線全線の点検を終え十一日から運転再開した。

運転を見合わせていたのは山陰線の赤碕―荒島間、伯備線の上石見―伯耆大山間と、境線の全線。境線は十一日午前一時二十五分、山陰線は午前二時十九分、伯備線は午後零時三分になって、それぞれ開通した。

運転を見合わせた当時の、山陰線には五本の列車に六十三人、伯備線は三本に三十人、境線は一本に三人がそれぞれ乗っていたため、同支社はタクシーとバスで代替輸送した。

（10月12日　山陰中央新報抜粋）

鳥取西部地震で調査委見解

余震、長引く傾向

政府の地震調査委員会（委員長、津村建四朗・日本気象協会相談役）は十一日、鳥取西部地震について「余震活動は、平均的なものより若干長引く傾向が見られるが、今月末にはマグニチュード（M）3・0以上の余震は、一日当たり五個程度に減る」との見解を公表した。

調査委によると、十一日夜までの最大余震は八日夜に起きたM5・0。十一日正午から三日以内にM5・0以上の余震発生の確率は約一〇%と推定している。

また、震源付近から約五キロ離れたところで確認された南西方向の活断層と、今回の地震との関係については「無関係」と評価。地質調査所から「同県西伯町付近で数カ所、震源断層とみられる地表の亀裂や変形が見つかった」との報告があったが、これらの断層が地震を起こしたとの結論には至らなかった。

米子空港が再開
伯備線一時運休

鳥取西部地震の影響で滑走路に多数のひび割れが起き、閉鎖されていた鳥取県境港市の米子空港は十一日、五日ぶりに再開された。一方、十日夜には震度4の余震があり、安全確認のためJR伯備線の一部などが一時運休した。

米子空港の再開第一便は東京発の全日空811便で午前八時三十五分、濃霧に包まれた同空港に着陸。乗客百十五人が降り立った。島根県の出雲大社などを訪れる団体客約六十人が中心で、東京都足立区の星野光男さん(六四)は「空港再開が旅行に間に合ってよかったが、被災地なので手放しには喜べません」。

十日夜の余震のため、JR西日本は午後十時すぎから山陰線と伯備線の一部、境線の全線で運転を見合わせた。

（10月12日　産経新聞抜粋）

伯備線

余震で14時間運休

特急など3本立ち往生

4時間の立ち往生に、JR生山駅に到着、代替バスに乗り込む乗客ら＝日南町生山で11日午前2時20分、青木勝彦写す

10日午後1時半に運転が再開されたJR伯備線は、同日午後10時ごろの余震（震度4）で、再び運転見合わせとなり、約14時間後の11日正午過ぎ、ようやく復旧した。

この影響で、岡山発出雲市行き「特急やくも27号」など3本が余震直後から11日未明にかけて駅間に立ち往生した。

29人が乗車していた「やくも27号」は生山―上石見間の下石見信号所で約4時間も停車。11日午前2時13分、生山駅（日南町）にようやく到着し、代行バスで各到着予定駅まで乗客を運んだ。

米子駅には、代行バスが同日午前3時半に到着し、10人が下車。出張途中の広島市西区の会社員、土屋昇さん(48)は「列車の中はあきらめムードが漂ってました。地震が相手では仕方ありません」。米子市内の実家に帰省する兵庫県姫路市の栄養士、松本将志さん(22)は「4時間も缶詰めになるのは初めて。車内は特に混乱はなく、静かだった」と話していた。

JRでは、震度5以上で周辺区間の運転見合わせ、震度4ではいったん停止後、徐行運転をする。今回の余震は気象庁の記録は4だったが、伯耆大山駅の地震計は5を観測。6日の地震で土砂崩れや落石があったため米子支社管内全線にわたり、運転を見合わせて安全点検をした。

【武井澄人、青木勝彦】

（10月12日　毎日新聞抜粋）

11日午前部分運休

余震でJR伯備線

十日午後九時五十八分、米子市蚊屋のJR伯耆大山駅に設置された地震計が震度5相当の余震を感知したため、JR米子支社は十一日、伯備線の伯耆大山―新郷（岡山県神郷町）間の運転を始発から見合わせた。

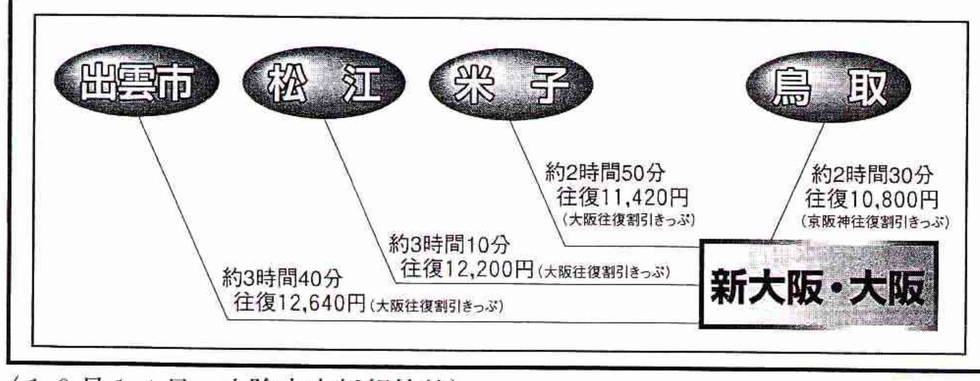
線路と構造物の安全確認を実施し、米子駅を特急は午後零時、普通列車は同一時に出発する列車から運転を再開。特急「やくも」「スーパーやくも」（岡山―出雲市）の上下線十本、普通列車の同九本が運休となった。

（10月12日　日本海新聞抜粋）

JR西日本 伯備線が運転再開

このたびの鳥取県西部地震により被害を受けられました皆様に、心からお見舞い申し上げます。
くれぐれもご健康にご留意され、一日も早く復興されますことをお祈りいたします。
当社におきましても、この度の地震のため、伯備線が数日間不通となったのをはじめ、他の線区においても、列車が遅れる等大変ご迷惑をおかけいたしました。復旧が遅れておりました伯備線につきましては、10日から一部、12日から全面的に運転を再開することができました。復旧に際しまして、多くの皆様のご理解とご協力をいただきましたことに感謝を申し上げます。
今後とも社員一同、安全で正確な列車の運行に努めてまいりますので、これまで以上にご利用いただきますようお願い申し上げます。

平成12年10月14日　　西日本旅客鉄道株式会社　米子支社



(10月14日　山陰中央新報抜粋)

鳥取県西部地震

震度5以上の揺れ4、5秒

「阪神」の3分の1 人的被害に差

鳥取県西部地震で、人が思うように動けないとされる震度5以上の揺れが続いたのは四―五秒と、阪神大震災の三分の一程度だったことが十七日、高田至郎・神戸大学工学部教授(地震防災)の観測記録の解析でわかった。最初の揺れから震度5に達するまでの時間も三秒ほど遅く、被災者らは「表に飛び出した途端、家が崩れた」と証言。高田教授らは「数秒の時間差が人的被害に大きな違いを生んだ要因の一つ」と指摘している。

鳥取県西部地震では、十七日現在、鳥取、島根両県で全半壊などの被害を受けた建物は七千棟を超え、負傷者百十七人を出したものの、死者はなかった。

高田教授は震源地に近い米子市、江府町、日南町の三地点について、科学技術庁が公表した地震の加速度記録から地震発生から終息までの揺れの大きさや揺れ方の変化を解析した。

各地点とも最初の縦揺れを感じてから徐々に揺れが大きくなり、五秒後には震度5以上となったが、四、五秒続いただけで、それ以降は震度4以下になった。

これに対し、六千四百三十二人が死亡した一九九五年一月十七日の阪神大震災では、最初の縦揺れ[illegible]の二秒後に震度5となり、約十五秒間続いたとされている。

高田教授らは地震三日目の八日から三日間、震度6強に見舞われた鳥取県境港市で、全壊とされた民家十八棟のうち十六棟の被災者に聞き取り調査。

地震当時、被災者が自宅にいた四棟は外に出た直後に家が倒壊し「揺れを感じ道路に飛び出した途端に自宅が倒壊した」「体の不自由なおじいさんが玄関先まではい出したのを、建物が崩れる直前に隣家の人が助けた」などと証言した。

調査に加わった同大大学院生、鍬田泰子さん(24)は「強い揺れが続いた時間がわずかに短かったのが避難行動の差となり、死者・負傷者数に大きな違いが出たのでは」と分析する。高田教授は「倒壊家屋の大半が築五十年以上の木造建築で耐震診断を受け補強することが重要だ」と訴えている。

JR西、損失13億円

伯備線復旧など

JR西日本の南谷昌二郎社長は十七日の定例会見で、鳥取県西部地震による損失見通しは十三億円と発表した。土砂崩れなどで四日間不通になった伯備線の復旧費などに八億円、運休に伴う収入減が五億円。

また、赤字による廃止計画が出ている広島県の可部線可部―三段峡間に来月から列車を増発、利用状況を見るが、廃線の方針は変わらないことを強調した。

(10月18日　読売新聞抜粋)

鳥取県西部地震

旅館 風評被害13億円

キャンセル6万人近く 施設損壊は1億円

鳥取県旅館業環境衛生同業組合(加盟214館)は19日、鳥取県西部地震によるイメージダウンで生じた加盟宿泊施設の予約のキャンセル状況を発表した。風評被害は県全域に及び、地震発生の6日から17日までの集計で、施設・物品被害を合わせた被害総額は約13億2000万円に上る。

組合が加盟旅館に問い合わせたところ、134館が回答した。キャンセルは、宿泊が延べ4万7466人、休憩・食事が延べ1万45人で被害額は約7億5700万円。宿泊客の飲食や物販などを見込んだ被害額は約3億7900万円、施設や食器などの被害は約1億8700万円だった。

施設被害のうち約1億円は、岸本町のホテルの1フロアの損壊で、他の宿泊施設は通常営業を続けており、ほとんどが風評被害という。

同組合の笠見重利専務理事は「今年の秋は予約が好調だっただけに、地震は大きな痛手。新たな予約がほとんど入っておらず、通常営業を続けていることを広くPRしていきたい」と話している。【田中 成之】

M「7.3」修正せず

気象庁長官

鳥取県西部地震の規模を表すマグニチュードの気象庁発表値(7・3―暫定値)が阪神大震災などと比べ高すぎると専門家らから指摘されていることについて山本孝二長官は19日、「今の計測システムと、定められた公式で求めれば7・3になる。確定値は多少変わるかもしれないが、7・3が適正な値かどうかは議論しない」と述べ、現時点では下方修正しないことを明らかにした。

しかし山本長官は「災害の程度との関係で混乱を招く場合もあるので、国民にわかりやすいマグニチュードのあり方を考えたい」とも述べ、今後、地震学者による検討会を設置し、より的確に地震の規模を表すとされる「モーメント・マグニチュード」を算出・公表するなどの方策を検討する方針も示した。

米子で震度3

19日午前8時3分ごろ、中国地方で鳥取県西部地震の余震とみられる地震があった。大阪管区気象台によると、震源地は島根県東部で震源の深さは約10キロ、地震の規模を示すマグニチュードは3・8と推定される。主な各地の震度は次の通り。震度3=鳥取県米子市、島根県安来市▽震度2=鳥取県境港市、西伯町、会見町、島根県東出雲町▽震度1=松江市、岡山県美甘村

(10月20日
毎日新聞抜粋)